

幕末期の儒学者

柏の偉人 芳野金陵

墨書など40点を独自に蒐集



庭仕事をしていた藪崎恒雄さんは気軽に話をしてくれた

柏市史に十一ページにわたって解説され、「柏のむかし」（市史編さん委員会）では「まさに暗夜の星、光芒の一線として、郷土が誇り得る偉人」とまで絶賛されている芳野金陵（一八〇二—一八七八）という人がある。松ヶ崎出身の、幕末期の儒学者である。

その芳野金陵の墨書、書簡、遺稿など四十点を蒐集したのが名戸ヶ谷の藪崎恒雄さん。自宅の敷地に建てた「弥惣治文庫」で公開している。大町桂月の資料展のときも紹介したが、「市教委が何もやってくれないので、この偉人の資料を自分で蒐集した」と藪崎さんはいう。

名戸ヶ谷の野惣治文庫で公開

金陵は享和二年（一八〇二）、下総国相馬郡松ヶ崎で医業を営む芳野南山の第三子として生まれ、長じて江戸へ遊学、亀田鵬斎の子綾瀬の門を叩く。以後二十年間、家塾を開く。弘化四年（一八四七）に駿河国田中藩主本多公の儒官となる。「旧弊を除き、新政を布く」など藩の活性化に励む。文久二年（一八六二）に幕府に抜擢され、昌平黌の儒官になる。新政府になり、再び昌平黌の教授になる。

ペリー提督率いる艦隊が浦賀に来航し、吉田松陰らが死罪になる安政の大獄というあわただしい時代、金陵も建議に加わったという。退官後に「帰耕の時、地を大塚に購いて懇田に従事し、傍生徒を教え」七十七で病没している。

巻石堂病院の先祖が、金陵の兄道斎（儒医）で、関係者で組織する金陵会が九月に、柏そごうで展覧会を開く。藪崎さんも協賛して墨書などを展示するという。さらに、桂月・金陵に続いて、金陵の師・亀田鵬斎の資料の蒐集が始まっており、秋には公開するそうである。

古栞弾罷風吹坐

山閣醒時月照林

古栞弾じ罷めば風坐を吹き

山閣醒むるの時月林を照らす

←この2行の掛軸を読む

